古民家だより

No. 43
令和４年（2022 年）５月２７日（金）
越谷市教育委員会　生涯学習課

郊外では田植えも進み、畑では菜やサヤエンドウなど育っています。「菜畑を去り惜しむがに　黄蝶白蝶の去りては来たり舞ひつれて居り」（善太郎）（「曠野」昭和６年７月号：当時の越ヶ谷町で発刊された文芸誌）

「綿は天下の霊財」

人間が初めてまとった衣服はどんなものだったでしょう。植物の葉、獣の皮・・・毛や繊維を糸状にしたものを編んで作ったものはどのようなものだったのでしょう。人間が自然界から作り出した繊維には植物性のものと動物性のものがあります。

現代社会の中で私たちの日常生活の中に当たり前のようにある綿製品。これが日本で一般庶民に普及したのは意外に新しく、近世（江戸時代）に入ってからでした。越谷市指定文化財・旧東方村中村家住宅と国登録有形文化財・大間野町旧中村家住宅では綿を種から育てています。今年は５代目になりました。今号では綿の生長過程を辿りながら、木綿の特徴や市域での生産についてご紹介します。

このように育ちます

発芽：最初に根が伸びます。

数日すると葉が出てきます。

双葉が生長します。この頃に鉢に植え替えます。

茎が伸び、葉も多くなります。

盛夏の頃、花が咲きます。白色の花は夕方に紅色に染まるものもあります。

花の後に実がなります。

秋に実が割れます。

綿毛が出てきます。実は4つの部屋に分かれていて、それぞれの部屋に6個前後の種が入っています。

綿の特徴

- アオイ科ワタ属の植物です。
- 花の色は白色や黄色です。
- 発芽してから収穫までに５ヶ月くらいかかります。
- 綿布は麻布よりも保温性に優れています。布団には、綿の普及前は藁（わら）や麻くずなどを入れていました。

（「真綿（まわた）」は植物の綿ではなく、蚕（かいこ）の繭（まゆ）からとったものです。）

旧東方村中村家住宅に時々綿の様子を見に来て下さる市民の方が自ら栽培されて、その様子を報告して下さいました。このような交流が出来ますことは、大変有難いことです。

種類と起源（「世界有用植物事典」平凡社、「人文地理学辞典」朝倉書店　等による。）

いずれも数千年前からの生育起源があります。

◆**リクチメン**（陸地棉）・・・中米（メキシコ付近）起源。現在、世界の綿の 70%を占めています。

◆**カイトウメン**（海島棉）・・南米（ペルー付近）起源。エジプト綿もこの一種。

◆**アジアメン**（アジア棉）・・この中で**キダチワタ**（木立棉）はインド起源。**シロバナワタ**は西アジア～インド起源。日本へはこのアジアメンが伝来。

日本への伝来と普及

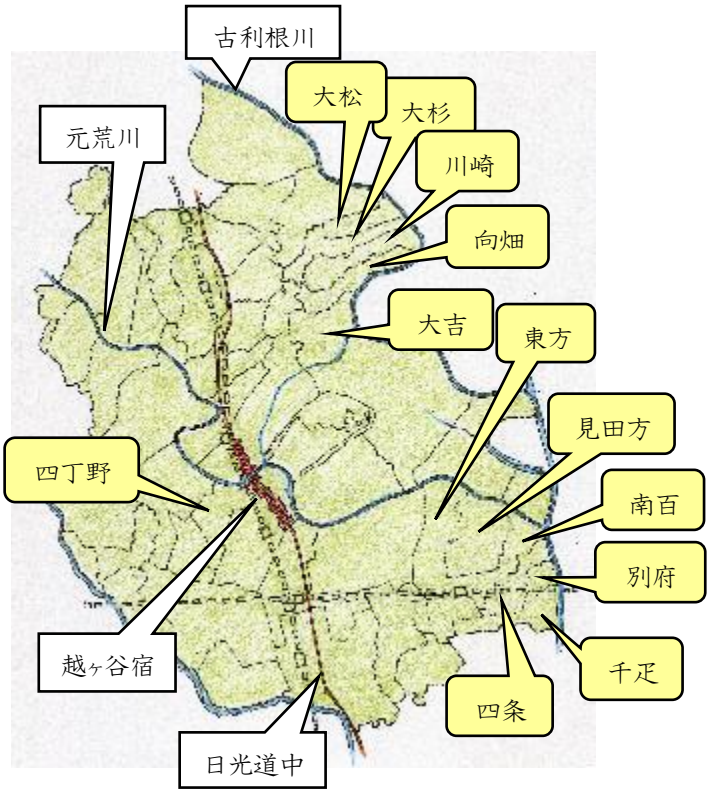
８世紀に東南アジアから日本に漂着した人が初めてもたらしたとの記録があります。（「類聚国史」、「大日本史」）その後しばらくは根付きませんでしたが、16 世紀（戦国末期）から少しずつ栽培、綿布生産が行われるようになりました。そして江戸期には干鰯や油粕などの金肥が流通するようになったこともあり、綿は急速に普及していきました。当時の農学者・宮崎安貞は著書「農業全書」（17 世紀末・元禄期）の中で次のように書いています。

古木綿が行き渡らない時代には、多くの人が麻布の服だったので、冬の寒気を防ぐことが困難で困苦にたえなかった。幸いにも綿布を作るようになって体をおおうことができるようになり、誠に天恩のなすところであり、綿は天下の霊財というべきものである。

越谷市域でも綿を生産した！（「武蔵国郡村誌」より）

以下に記す統計は明治８年（1875 年）以前の状況を示していますので、近世（江戸期）末期の状況と考えてもよいでしょう。

村　名	人　口			生産量
	男	女	計	（1 貫目≒3800ｇ）
千足（せんぞく）	170	163	333	綿 65 貫目
別府（べつぶ）	35	33	68	綿 25 貫目
四条（しじょう）	104	95	199	綿 50 貫目
南百（なんど）	92	87	179	綿 17 貫目
見田方（みたかた）	161	174	335	綿 900 貫目
東方（ひがしかた）	314	343	657	綿 13.6 貫目
四丁野（しちょうの）	205	206	411	木綿布 910 反
大吉（おおよし）	82	106	188	実綿 81.25 貫、木綿布 300 反
向畑（むこうばたけ）	182	204	386	綿 420 貫目
川崎（かわさき）	139	140	279	実綿 120 貫目、木綿布 120 反
大杉（おおすぎ）	100	100	200	実綿 96.18 貫目、木綿布 350 反
大松（おおまつ）	63	50	113	実綿 88 貫目、木綿布 80 反



木綿普及以前からの植物繊維としては、麻布（苧麻（ちょま））、芭蕉布（ばしょう）、科布（しな）などが多く用いられています。

産業革命を早く達成した国は安価で大量の綿製品を生産するようになり、手軽に綿製品を入手できるようになりました。しかし、そのことによってまた世界に新たな課題が生まれてくるようになりました。

そして近年、天然繊維の生産は減少の一途をたどっています。わが国では現在、近代工業に用いる綿花の自給率はほぼ０％です。（「生活工芸双書　棉」（農文協）、「日本国勢図会」（矢野恒太記念会）などによる。）